

# 悲剣肌風 発動編

裸形で覚醒する女人剣



濠門長恭 著

卷之一

## 登場人物

### 柴田弥恵

弟と共に父の仇討に赴く。仇討の意義に疑問を持たぬでもないが、武門に生まれた者の宿命と信じている。神崎古流の四番札。得手は小太刀。  
なお、父・柴田弥一郎が殺害された経緯は不明。

### 柴田七郎

仇討の名義人。神崎古流の十六番札と姉には譲るが、それなりに剣術の心得はある。

### 奎助

柴田弥一郎の信頼篤かった中間。

### 神崎正安

武術百般指南・神崎古流六代目。妻帯せず。殺気などという「気」は無いと断ずる合理的精神の持ち主。己より強い敵には「正当の奇策」で立ち向かえと弥恵に教える。

### 藤原数馬

柴田弥一郎を斬殺して隣藩に逃亡し、城下で堂々と剣術道場を開く。神崎古流のずば抜けた一番札。

### 小島要介

弥恵の許婿。柴田弥一郎斬殺により婚約は解消されたが、弥恵が骸となる前に初物を味わおうとして、弥恵に投げ飛ばされる。

# 目次

一	末期の目	.....	五
二	父と許媚	.....	四
三	神崎古流	.....	十六
四	大道芸人	.....	四
五	生胴試し	.....	
六	芝居狂い	.....	
七	御前仇討	.....	
八	卑剣昇格	.....	
後書	き	.....	

一・末期の目

丘を登り詰めると、緑の遠くに一面の紺碧が広がっていた。むせ  
るような草いきれを吹き払う風に、かすかだが潮の香が息づいてい  
る。

「これが……海というものですか」

柴田七郎が足を止めて、姉の弥恵を振り返った。十四歳の少年は、  
誰彼となく感動を分かち合いたいとばかりに頬を紅潮させている。  
そして絶句していた。

弥恵も弟の斜め後ろで立ち止まり、生まれて初めて見る海の途方  
も無さに無言で眺めいつた。海は視野の端から端まで連綿とつづき、  
遠くは空へとつながっている。

子細に眺めれば、紺碧の海原には濃淡があり煌めきがあった。ご  
つごつした岩場に白く砕ける波のあたりの緑がかった細い帯は、す

ぐに明るいきざ波が夏の陽を照り返して金粉さながらにつれて黒味を増していた。溶け込むあたりに一艘の船が浮かんでいた。白い帆に風をはらんで、このだが、進んでいるように、はまるで見えない。―これが海というものの、なのですね。―

―弥恵は弟の言葉を繰り返した。―

―目も心も洗われる思いです。―

死を覚悟すると、目に映るものすべてが新鮮に、輝いて見えると、いう。これがそうなのだろうか――とは、口に出さない。―

―のどかなもんです。が、時化たときは家から眺めるだけで、脚が震えます。―

―横波を食らえば、千石船でも、ひとたり控えた後ろから、奎助がふたりから一間半（三メートル）ばかり控えた後ろから、年輪を無遠慮に声を掛けた。この男は四十五歳と姉弟の三倍ほども年輪を重ねているだけあって、世事に明るく、これまでに姉弟の知らない名物料理やら神社仏閣を案内してくれ、たものだ、が、それにしても実

感のこもった口ぶりだった。

「でも、海は塩と食べ物で恵んでくれます。ほれ、あそこ……」

弥恵の一步後ろまで近づいて杵助が指さしたところ——明るい青色の中に突き出た黒い岩場のまわりに、三艘の小舟が浮かんでいた。

「岩の根に海藻が生えて、それを餌に魚や貝が集まってきました。それを漁っているんです」

小舟には下帯一本に半纏をまとった男がひとりずつ乗っているが、とくに網を打ったり釣り糸を垂れているでもない。とはいえ、油断なく海面を見張っている様子は、のんびりと休んでいるふうでもなかった。

果たして。小舟の近くに丸く白いものが浮かんだ。布で包んだ人の頭だった。それが小舟の縁につかまって、何かを舟底へ落とし込

んだ。海に潜って、じかに漁っているんです」

「海に潜って、じかに漁っているんです」

寄つてたかつて獲物を漁れば、すぐに根を枯らしてしまふ。その一  
方で、女のほうで辛抱強く寒さにも強いから、真冬は無理だが春先  
から秋の終わりで漁ができる。腰まである草を掻き分けながら細い道をくだつて行つた。北西へ  
腰までもある草を掻き分けながら細い道をくだつて行つた。北西へ  
北国街道を北上して海岸に出る。進言だつた。たしかに道のりは半  
突つ切つたほうに近いとは、杳助の進言だつた。たしかに道のりは半  
分にも縮まつたようだが、良くても村と村をつなぐ細い道、どう  
かすると杳道を歩く結果となつた。しかも、村々に小さな寺があり  
神社もある。仇討の旅にある姉弟として、そのまま通り過ぎるわ  
けにもいかない。七郎は信心を持つ年頃ではないし、弥恵も神仏に頼る心持ちはな  
い。怪力乱神を語らず。それは神崎古流の心得でもあるし、一行の素  
え。仇討の身としては本懐成就を祈願するべきであるし、一行の素  
性を知る者がいない地だからといつて振る舞いを違える小狡さもな

かった。

つまり、近道のつもりが逆に日数を食ってしまったのだった。増沢藩の城下からまっすぐに咲川藩を目指すなら、険しい山道を北西へ進む方法もあった。道のりだけを見れば、三分の一ですむ。しかし山には毒虫も多いし蝮もひそんでいる。山中に茶屋のあらうはずがないし、湧き水に中れば腹をくだすだけでは済まぬかもしれない。大事を控えてつまらぬことで体調を崩す愚を説き、急がば回れと街道沿いを姉弟に勧めた奎助にしては、迂闊な判断だった。

いや。進言を採り上げるも否も、長たる者（ここでは七郎）の判断であり決断である。出立のとき、はやる弟を抑えて強く街道沿いの経路を勧めた弥恵だけに、ここに至ってのわずかな近道に懸念は残ったが、奎助が言うならばとの安心もあって、重ねての口出しは控えたのだった。

結果として咲川藩への到着は遅れるが、弥恵はそこに不都合を感じていなかった。仇は堂々と城下に居座っている。そして、勝算の

ない仇討が先延ばしになる……。

い海岸沿いの街道を半刻も歩くと、すこし広まった場所に茶屋らし

い小屋があつた。

「お婆さん。ここで弁当を使いたいが、かまいませんか」

七郎が慇懃にことわつてから、姉弟は並んで縁台に座つた。奎助

が葛<sup>つづら</sup>箆から握り飯を出してふたりの横へ置いた。同じ縁台の、七郎

をはさんで弥恵とは反対側の端へちよこんと腰をおろしたのが、奎

助の主人への遠慮であり、別の縁台を使わなかつたのが、これから

来るかもしれない他の客への気配りだつた。

「おかずになりそうなのは、ありませんか？」

七郎の言葉は茶店への気遣いというよりは、おのれの腹具合だつ

た。

「すみませんねえ。朝のは売れてしまつたです。もうちつと待つて

くだされば……ほれ、樽をすれば」

老婆が海の一点を見つめてから、やおら大きく手を振った。

「うん……？」

七郎も弥恵も、こちらへ漕ぎ寄せてくる小舟は見えていたが、それが茶店と関係があるとは思ってゐなかつた。

「婆さん。歳のわりに目が達者だね」

「目と口だけはの。海は孫娘たちに譲ったわい」

ちゅうげん

中間の奎助に対しては、老婆も気さくに応じている。

見ているうちに小舟は矢のような迅さで近づいてきて砂浜にどし上げた。若い娘がふたり、籠をかかえて駆け寄ってくる。

「お客さんの姿が見えたんで、大急ぎで戻ったんよ」

籠は大小の魚貝類でいっぱいだった。それを茶屋の脇の小さな生簀へ移して。

「選り取り見取りだ。言うてくれたら、じきに焼きますじゃ」

三人とも品定めどころではなかつた。茶屋の奥で団子をばくつい

ているふたりの海女に、海千山千の奎助でさえ、目をみはっていた。  
見事に灼けた赤銅色の肌――が、丸見えなのだ。女だてらに下帯  
を締め込んで、『とみはま』と染め抜いた短い法被を羽織って。それ  
だけだった。帯すらも締めていない。姉妹なのだろう。弥恵よりも  
ひとまわりは小柄な娘は乳房も膨らみかけで尻にも硬さが残ってい  
る。姉のほうは、その正反対。たわわに実った乳房と、豊かに張つ  
た腰。そうだったすべてが三人の目の前に晒されていた。

（綺麗：：）

神崎古流の切り紙を許されている弥恵は、姉妹の肉体に均整のと  
れた力強さとしなやかさとを見ている。人通りのある道端で年頃の  
娘が真昼間から半裸を晒していることには、姉妹の態度があまりに  
おおらかだからなのだろうか、卑猥さも嫌悪も感じなかった。  
いかにも、仇討のために元服を繰り上げた七郎のほうは、そうも  
いえないようにだった。袴の前が異様に盛り上がっているのに気づい  
て、弥恵は眉をひそめた。

「お侍さん。どれにしますかい？」

「小魚を適当に。それと、鮑があれば……」

七郎の頭には、三年前に隣家の祝い事でお裾分けにあずかった熨斗鮑の煮物があつた。干物にしてあれほどに美味しいものなら、採れたては如何ほどのものか。

七郎は歳のわりに大柄だから、年齢を見誤られたのかもしれない。海女の姉のほうにくすつと笑つてから。

「まだ海仕事があるけ、今日のところは生簀の鮑で堪忍してください。」

妹が、きやあと法被の襟に顔をうずめた。左助もにやにやして、る。女性器を鮑にたとえることなど弥恵も七郎も知らなかったし、まして、娘がわざわざ『今日』と言つた裏に暗示された意味に気づくはずもなかった。

「こら。若い娘さんの前で、戯れ口はたいがいにせんかい」

老婆にたしなめられて、姉妹はきよとんとした。それから、弥恵の姿をしげしげと眺める。男物の薄羽織に仕舞袴、刀袋に収めた大刀を肩に背負い、腰には大脇差を帯びているが、もとどりを高く結んだ。『根取』は女の髪型だった。現代風にいえば、ロングポニーテール。女髷に結っていないから、激しい動きで不意にほどけて視界を妨げられるおそれがない。―あれまゝ失礼しました。勘弁してください―姉がぺこんと頭を下げてから、また漁場へ戻ると言い置いて小走りには浜へ向かった。赤銅色の双丘が鞠のよう弾んでいる。妹のほうには、まだくすくす笑いながら姉を追って、ほっそりした両脚が男の子のよう跳ねている。新鮮な魚貝が直火に焼かれる握り飯の包を開いたのだった。ぷりつぷり文字どおり一行は持参した握り飯の包を開いたのだった。旅人に海の幸を供して日

錢を稼ぐ。なんの苦勞もない生活——では、ないにしても。父の無念を晴らしたいという気持ちに偽りは無いとはいえ、武家の打算（仇を討たねば家は絶える）も交えて、勝てる見込みの無い敵の懷へ飛び込んでいく自分たちよりは、よほど自然に生きている。生まれて育ち、食べて寝て、子供を作つて育て、老いて死んでゆく。そのどこに、侍の意地が紛れ込む隙があるうか。弥恵は、握り飯が喉につかえる思いだった。

——娘の名は柴田弥恵。十七歳。幼いころはとんでもない御伝馬おてんばで、十五

その心根を矯めようと考えた父の命で、六歳の秋に神崎古流入門させられた。御伝馬を矯めるのに武術を習わせるといふのも奇妙な話だが、弥恵は武術に熱中して、また師匠の言（武術の心得有る者が無き者をいじめるなど卑怯千万）を守つて日頃の御伝馬は鳴りをひそめたのだから、父の計略は図に当たつたといふべきだろう。弟の七郎は十四歳。仇討の名目人だが、劍の腕は弥恵におよばな

い。嫡男なのに七郎と名付けられたのは、母の名である七恵の一字を授かったからだ。まかせられぬ用事を言いつかっている中間。父の信は篤く、他者には術には縁がない。だからこそ、みずから供を申し出た奎助を、弥恵は即座に許した。いささかでも腕に覚えがあれば助太刀などとしやしやり出て、命を落とすだけだ。死ぬのは二人だけで沢山だと、すでに弥恵は覚悟を決めている。七郎とて近頃の少年にしては文武に熱心で、四十人を超える神崎古流の門人中、大人に交じって十六番札を守っていた。その自信が、四番札の姉と二人掛なら、一番札が相手でも勝機を見出せると信じさせている。しかし弥恵は、敵の腕を見誤らぬだけの力量をそなえている。二番札の当摩慎三、三番札の野波恒明とともに、弥恵は神崎道場の三羽鳥（人によつては鷹と隼と鶴）に数えられていた。しかし一番札

の藤原数馬は、烏だろうと鶴だろうと齒牙にもかけぬ天狗に擬せられていたのだった。

神崎古流はひとつ剣術の流派ではない。槍と小太刀は言うまでもなく、手裏剣や弓、薙刀や捕縛術まで手の内にある。とはいえ、そのひとつひとつに独自の奥義があるわけではない。たとえば鉄砲術などは、年に一度、高弟だけを引き連れて獵師を訪ね、実際に射撃の経験を積みせはするが、それ以上の修練はしない。戦の場で役に立つほどに鉄砲術を心得ている者は、藩の鉄砲方に勤める土岐能次郎と姫久寿利の二人だけで、神崎正安といえども彼らには及ばない。しかし、すべての武術に通底する理念が、神崎古流にはあった。

その理念こそが神崎古流の真髓なのであるが、それは措くとして。剣の勝負で、弥恵は一度も藤原数馬に勝った例しが無い。小太刀（相手は大刀）なら五本に一本くらいは相討ちに持ち込めたが、それも剣の技だけだったかどうか。

「肌が触れるほど女人に近寄られると、どうにもかなわん」

藤原の照れくさそうな顔を見てみると、当の弥恵も半分は納得してしまふ。相手の懷に飛び込んでしまえば、長い得物よりも短い武器に利が移る。あとじさつて間合を取りなおそうとすれば、そこに隙が生じる。いっそ組討ちに持ち込めと、神崎古流は教えている。しかし藤原は、一度たりとも弥恵に組み付いたことがないのだった。弥恵が槍で藤原が劍の場合は、女人の肌が遠いせいなのか、劍と劍とで仕合うよりも簡単に負けてしまふ。うな相手ではないし、たとえ当たっても、よほど急所に撃ち込まないかぎりには戦鬪力を奪えない。いっそ最初から組討ちを仕掛ければ、命の遣り取りに、まさか女人の肌もないだろう。

一行は海岸沿いの街道を西へ進み、五日目に咲川藩への分かれ道へ折れた。好奇心旺盛な少年も、箸が転げたただけでおかしがる乙女も、仇討の旅を意識して口数は極端に少ない。奎助だけが、このあ

たりでは雨戸に『へのへのもへじ』の貼り紙をした家への夜這いは  
許されないとか、佐々成政が愛妾の誰それを見初めたのはあの村だ  
とか、姉弟の気を引き立てるつもりか、頭の中身の虫干しをしてい  
る感があった。北国街道を道中していた折は左助の説明に興味を示していたふた  
りだった。が、今は短く相槌を打つのみで、仇が身をひそめていたふた  
なく、大手を振ってまかり通っている城下へ、一歩一歩距離詰め寄って  
行くだけだった。初めて海を見て以来、弥恵は心の奥底でかすかに蠢く何かを感じ  
ていた。それは――あえて考えないようになしてきた、死への恐怖だ  
ろうか。本懐を遂げねば再興かなわぬ柴田家の行く末だらうか。あ  
るいは、破談となった後、仇討への助力を口実に彼女を手籠めにし  
ようとした小島要介への怨嗟ないしは侮蔑だったろうか。  
まばらな松林が、密生した雑木の森に替わり、さらに半日も歩い  
て小さな宿場で夜を過ぎた。

絶道は狭いが、咲川藩と北国街道とをつなぐ要路だけに旅人の姿が  
けた。秋になると、咲川藩から城下へ向かう海産物の荷駄もたまに見か  
馬が長蛇の列を成すのだと、奎助が見てきたようなことを言う。た  
るほんとうに見たのかもしれない。奎助は半月の余も姿を消してい  
使いを手駒の中間に託すとは――娘の目から見ても胡散臭い。いや、  
このへは来ていないかつたはずだと弥恵は思い直した。来ていたら、  
道のりは短くなつても日数は余計にかかる間道を勧めたりするはず  
がない。――道端に十人ほどが立ち止まつて、ゆるやかな谷底を眺めてい  
るところに行き当たつた。谷底には三、四十人が群がって、小  
さな川を堰き止めて、泥を浚つてゐる。子供も十人ばかり交じつて  
いて、こちらは水に置いてきぼりをくらつた小魚をたも網で掬  
っている。

「楽しそうだなあ」

七郎がはずんだ声をあげた。

「五つのときでしたか。私も川浚えを手伝ったことがあります」

弥恵も思い出している。母の実家は大きな庄屋だった。三人目の子は悪阻がきつく、母は静養をかねて里帰りした。弥恵と七郎も母に連れられて、半年ほどは村の子供たちと一緒に遊んだものだった。そして柴田の家へは、父に連れられて帰った。五歳の幼児は楽しかった記憶を心にとどめ、八歳の少女は悲しみの記憶を心に刻んだのだった。

「茂作、五平！ こっちを手伝え！」

川の上流で大声があがった。

「土手が崩れそうじゃ！」

呼ばれた二人につづいてさらに数人、鋤や鍬を取って駆けつけた。そこは、川を堰き止めたまわりを掘り広げて小さな池になっていた。本筋の川を迂回して小さな放水路が切られているが、その一面に水

がとどこおって、見る見る膨れていった。

「駄目じゃ！ 皆の衆、川から上がれえ！」

怒号というほどではなく、女子供ものんびりと川底からはなれる。それを待ってから、掘割に取りついていた男たちが、水の膨らんだ根元に鍬をいれた。溜まっていた水が奔流となって川に真横から突き当って飛び散り、川べり近くに残っていた者たちをずぶ濡れにした。わあきやあと、おもしろがっているような甲高い悲鳴。

（む：：？）

一直線の鋭い流れ——突き。心の隅で蠢いていた気配が、わずかに鎌首をもたげた。喉ではなく、幅の広い胸元を狙ったところまで：：十中十までかわされるだろうが。まっすぐ下がるなら、そのまま体当たり。たとえば自分は斬られても、ぶつかるとさえできれば敵も体勢を崩すこと必定。七郎の攻撃までは防げない。が：：それくらい、藤原なら瞬時に判断する。

れんのが  
胸ばで浅ら横  
底、い右ざ  
の相右をま  
蠱手片袈にか  
動が手で袈藤  
は着脛斬原さ  
、地脛りか  
虚すを。から  
しく狙。見打  
くまでそのれち  
萎に。刃ば込  
えてこ。を、ま  
いち届か弥れ  
ったのく恵はば  
。体どぐ左：  
勢う。つから：  
をか。弥右の  
立。届恵へと  
直くがみきは  
すのし。ず。足  
は無てもから。引  
理も跳倒。き  
だ。ばれ。角  
。れ込度な

二・父と許媚

「鋭！　鋭！　鋭！」

七郎が諸肌脱ぎで本身を振っている。陽はまだ西の空にかかつて

いる。少々気合声を迷惑がられることもなかった。

「ええいっ、やあっ！」  
踏み込みながら袈裟に斬り下ろして逆袈裟に斬り上げる。頭の高

さで止めようとした切っ先が五寸ほど流れた。七郎は足を引きなが

ら正眼に構えなおして。

「鋭！　鋭！　鋭！」  
振り下ろす剣は、さすがにびたりと臍の高さで止まった。

弥恵は縁側に座して、弟の一举手一投足を見るときも視野に入

れていた。

時間さえあれば本身ではなく、もっと重い振り棒で基礎の筋肉を

鍛えさせたい。しかし、藤原をかくまっている咲川藩の城下はすでに半日の里程にあつた。先を急げば木戸が閉じるまでに行き着けた。だろ、が、弥恵はあえて手前の小さな宿場で足を止めた。このまま無策で藤原と対峙したくはなかつた。高橋輔允の食客として、城下に滞在して、藤原数馬は咲川藩の重役である。高橋某が家来に命じて窮鳥に逃げ、理由がなかつた。仇討の資格があるのは姉弟だけだつた。十人二十人と助太刀に頼れば、そのときこそ高橋某が家来に命じて窮鳥を護り抜こうとするだろう。現実問題として、助太刀を申し出てくれた者はいなかつた。弥恵は弟とふたりきりで、格段の技量を持つたあに弟子と対決せねばならぬ。ないのだつた。武門の家に生まれ、本物の天狗ではない。技量の差は正統の奇策で補えるかもしれない。敵は本物の天狗ではない。技量の差は

正統の奇策——と、師匠の神崎正安は言った。誰もが思いもつか  
なかつた、しかし理に適つた工夫という意味だ。

それにしても。ふつと弥恵の想念がうつろつた。藤原数馬は、何  
故、父を斬つたのだらうか。遺骸の傍らに残されていた斬奸状には、  
父が職分を超えて増沢煙草の流通にまで容喙し、一部の商人に利を  
独占させ、その者たちから巨額の賄賂を得ていると書かれてあつた。  
農事方家老の父が、煙草に關してだけとはいえ商人まで統制して  
いたのは、作事方家老の職分を侵している。従來の仕置にはなかつ  
た利割運上金を煙草株座に課していたのも事実だ。しかし、運上金  
は賄賂ではない。

その一両たりとも父は私していなかつたと、弥恵は断言できた。  
父が自分の着物を誂えたのは三年前だし、弥恵の嫁入り道具も、五  
百石の家格が泣くほど質素なものだ。運上金の過半は藩の財政を立  
て直すのに使われ、残りはすべて新田開発や灌漑事業、產品の開発  
に注ぎ込まれていた。

煙草の流通を握っていなければ他藩の商人まで跳梁するところとなり、増沢藩から利益が流出する。作物の囲い込みを計る仲買人も出るだろう。そうなれば、百姓は目先のわずかな手付金で何年も先まで縛られ、結局は商人どもに食い散らされてしまう。諭した。弥恵が傍らで耳を傾けるのをたしなめることになる七郎に教えあずかるのも一家の台所を仕切るのも同じことだと励ましてくれさえしたものだ。え。年々借金を重ねている諸藩の中にあつて、増沢藩だけは元本を返済していつてゐる。柴田弥一郎友則の才覚あつてこそ、越権を非難する者も、それを認めないわけにはいかなかった。算盤家老といふ陰口を、父は褒め言葉だと笑つていたが。家督を継ぐ前には神崎道場の四番札まで登り、目録を授けられたことを知る者は、これは少ない。では――同じ四番札でも切り紙の上位に当たる目録を受けたのだ

から、弥恵よりも父のほうが強かったかというところ、これは違う。今は門弟の数が当時の四倍、四十人余にもなっている。もし柴田弥一郎が政事に私情を交えたことがあったとすれば、それは部下に神崎古流を奨励したことくらいだ。毀誉褒貶を齒牙にもかけず、新たな仕組を作っても金の有るところからは取り、当面の利には囚われず無いたくるところへ多額の資を投じる。この大胆な合理性は、神崎古流の理念に相通じるものがあった。神崎正安の薫陶を受けて、彼の人格が熟成されたといえる。神崎弥一郎が授かった目録は、城へ登ろうとする弟子への師匠からの餞だった。弥恵のほうは、弥一郎が切り紙で止めさせた。――

「嫁の貰い手がなくなるぞ」  
目を細めて、父は笑った。  
――  
島政衛門重直の跡継ぎである要介重久。二人の家老の反目に業を煮

やした主君の肝煎りだった。

婚禮は一年後と決まっただけで、神崎道場に通り詰めた。弥一郎は黙認したどころか、嫁いでからも神崎古流をつづけられるよう柴田の家へ頼んでやろうかとさえ言い出す始末だった。

「けっこうです。わたくしも目錄を餞に、以後は夫一筋に仕えます」

父が殺された理由を細めて笑ったものだった。

父が皆目見当つかないのは――何故に藤原数馬が、という一事だった。

彼が政事について語るところを、弥恵は見聞した記憶がない。

五十俵三人扶持の三男坊とあっては部屋住みの肩身も狭く、婿養子のお話もなかなか難しい。剣名を上げて独自に仕官の道を斬り拓くか、より現実的な道としては神崎古流の七代目を継ぐか。彼が神崎道場の天狗に成りおおせたのは天稟もさることながら、確とした目

標を持つて研鑽に励んだからだろう。  
の。そんな彼がなぜ、神崎道場の後ろ盾ともいふべき人物を暗殺した  
のか。どうにも腑に落ちない話だった。誰かへの義理の筋か、それ  
とも大金に殺されたのか。

（………！）

弥恵の眼前を白刃が疾った――と、錯覚したのは一瞬。しかし。  
七郎の息が上がりかけている。さきほどから左手の握りが甘い。  
注意するのは簡単だが、本人が気づいてこそと、黙って眺めていた  
のだが。折りしも、女中が客を案内して曲がり廊下をこちらへ近づ  
いてゐる。四人連れなら、膝をついて障子を引き開けようとする女中  
の側頭部がある――とまで錯覚が広がった瞬間。  
「そこまで！」  
「弥恵の鋭い声に、七郎がぎくつと身体を止めた。」  
「ひええ………」

女中が腰を抜かして廊下にへたり込んだ。四人連れの男たちも、七郎と同じように凍りついている。

「驚かせて相済みませぬ」

女中と四人連れとに膝を向けなおして、弥恵は軽く頭を下げた。

「ああ、びっくりした。男のなりをしてらっしゃるだけあつて、飛

ぶ鳥も目を回しそうな気合ですねえ」

女中は弥恵に皮肉のひとつもぶつけてから、柱を支えに立ち上がった。女中が客を通したのは、弥恵が予想したとおりの部屋だった。

——弥恵の眼前を疾った刃は、超常的な予知によるものではない。

二人の動きを重ね合わせれば、七郎の太刀筋の延長線上で女中が動きを止めるだろうことは自明だった。間もなく七郎の手から真剣がすっぽ抜けるだろうことも、剣術を教えるくらいに者なら容易に予測がついた。そして姉ならば、修行に没入した七郎が、そこへ疲労も加えて、女中たちに気づいていない——太刀筋の向きを変えようとはしないだろうとも、見て取れた。それらすべてが不幸な偶然

で一致したときに起こるだろう最悪の事態を、無意識裡に予測したに過ぎなかった。――  
「疲れているようです。型稽古は、よしとおきましょう」  
弥恵が立ち上がった。

弘暁。旅籠屋の裏庭で昨日の七郎と同じ位置に立って、弥恵が素振り、一瞬の静止の後、左足を踏み込みながら無言の気合とともに振り下ろして、ぴたりと水平に止める。相手の肩に物打ちが達する直前から臍の位置で刃先が止まるまでの一瞬に、脇から指先まで順を追って絞り切られていく。刃を引いて一歩下がり、元の姿勢に戻って振りかぶると、今度は右足を踏み込んで斬る。何度繰り返しても、切っ先は同じ空間を切り裂いて同じ点で止まった。――  
筋肉を苛め抜く大きな動きを半刻ほどもつづけてから。弥恵は全身を汗にまみれたまま型稽古に移った。

ただひとりの型稽古。弥恵は受け太刀に藤原数馬の姿を思い描いた。渾身の力――ではなく、相手の思わぬ変化にも備えつつ、筋を切断して戦鬪力を奪えるだけの剣勢で斬りかかる。刃筋が正しく立っていれば、そして相手がなんの防禦も取らねば、両掌を絞りながら振りぬく剣は骨の髄まで断ち切るだろう。

しかし藤原数馬は、身を沈めつつ峰に左手を添えて頭上に横たえた刀身で弥恵の一撃を受け流す。弥恵は斜めに滑った太刀の勢いに逆らうことなくみずから身を翻し、その勢いで胴を薙ぎにいった。ガキン……と、頭の中に刃のぶつかりあう音を聞いた。だけでなく。数馬が左手で抜いた小刀に刃が弾き返される手応えさえ感じていた。『受け流し返し』の型にはない展開だった。仕太刀の刀勢が強ければ、この小刀は押し返されて姿勢が崩れ、受け太刀の不利となる。斬撃は迅くとも体重の軽い弥恵が相手だから成立する受けだった。

実際の果し合いではこのようになるのだろうと、弥恵は想像した。

さすがが一番札だけのことはある機に臨んで変に応じた型からの逸脱だつたが、それを無意識裡に予測した弥恵の力量と天稟もけつして劣つていなかつた。決死の、いや必死の覚悟が、常でない高みにまで弥恵を引き上げているのかもしれない。

しかし。

弥恵は、同じ型を受け太刀で演じてみた。真つ向から振り下ろされる刃筋。身を沈めながら、頭上で斜めに構えた大刀で受け流すと――仕太刀は踏み込んだ勢いをそのままに、肩から刀身にぶつかつてきた。刀が手から弾き飛ばされ、弥恵は押し倒された。その喉を、馬乗りになつた敵の切っ先が深々と貫いた。

ひゅうひゅうと喉を鳴らしながら断末魔の痙攣に襲われる弥恵を、薄嗤いを浮かべながら見下ろしている男の顔。それは藤原数馬ではなく、小島要介の顔だつた。

小島要介。弥恵にとって彼こそは、藤原数馬よりも憎い男だつた。父の供をしていた小者は浅手で助かつたが、夜の闇に紛れた賊の

顔は見えていない。しかし斬奸状に藤原数馬の署名があれば、そして直後に当人が逐電したとなれば、下手人を疑う余地もない。それでも弥恵は、藤原数馬が父を斬り殺す現場を目撃したわけではない。憎き仇と頭ではわかつていても、どこか実感に乏しい。しかし小島要介は――四十九日の法要の日、仇の消息が知れたと弥恵に伝えた。――いささか話が長くなりますし、万一にも他人の耳にはいると拙いので――

翌日、弥恵は町外れの出会い茶屋で要介と密会していた。二人を知る者が見れば、じゅうぶんに誤解を招きかねない振る舞いではあった。

要介がもたらした藤原数馬の消息は、先に記したとおりである。要介は、小島家の跡継ぎという立場を利用して、小者の幾人かを諸方へ遣わし、あるいは飛脚に仕事ついでに探索を依頼したりして。

藤原数馬が名を変えることもなく、増沢藩の北西で国境くにざかいを接してい

る咲川藩の重臣に庇護されていゝと突き止めた――と、弥恵に説明した。他聞をはばかるというのは、藤原数馬と咲川藩重臣の高橋某とはまったくの赤の他人であるという点だつた。遠戚でもなければ縁戚でもないし、神崎古流を介してのつながりもない。とすれば、両者を引き合わせた者がいるのではないか。――親父殿と高橋殿とは、国境の炭焼き部落を取り合つて喧嘩と仲直りを繰り返してきたそうだが――まさか、なあ――り炭焼き部落云々は、作事方家老としての職務ではない。国境を定めるとなれば、これは城代家老の役目である。にもかわらず小島政衛門が当事者にならざるを得なかつたのは、その一帯が藩から預かつたおのれの知行地だつたからである。小島家の台所にかゝる切実な問題だつた。それは高橋家でも同じ事情だつたようだ。暗殺に便宜をはかつてもいうのは、あまりにあり得ない構図だつた。暗殺の黒幕が政敵だつたというのには、あまりにあり得ない構図だつた。かえつ

て馬鹿馬鹿しい。煙草株座をめぐり二人の確執はのつびきならぬところまで来ていた。人質に取られたやうなものだ。など人情に絡める以前に。主君の肝煎りで和解したのであるから。すくなくとも煙草株座の運営には小島政衛門と手を携えてゐる。結果として他藩の商人との取引を幾分かでも認めざるを得なくなつたのである。つまり、小島政衛門が弥恵の父を排除する必要はなくなつたのだ。柴田弥一郎がいなくなつたならば、小島家が弥恵を嫁に迎える必要もなくなつた。心残りなく仇討に出立できるやうにと――主君におためごかしの言上をして、小島政衛門は縁談を白紙に戻してしまつた。に過ぎない。弥恵と七郎にはあつたが、それは当人を含めて些末事に過ぎない。公儀の目だつた。誰が大事は仇討ちであり、藩の政りかという藩内の問題もさることながら。高橋と藤原数馬の凶行を承

知のうえで庇護しているのであれば。窮鳥懷に入るといふわけでもあるまい。他藩の重臣が暗殺に絡んでいるとなると、これは国を跨ぐ陰謀である。公儀の知るところとなれば、両藩とも無事にはすまない。

「昨年あたりから咲川煙草とかいうのが売られているそうですから、増沢煙草は文字どおりに煙たい存在なのでしよう」

「そういった裏の事情が明るみに出ないうちに、藤原数馬の個人的凶行として事を終わらせねばならない。」

「喪が明けましたから、明日にでも仇討免許状は下されるでしょう。」

「すぐに立売されるのでしようね」

「そうさせていただきます」

「弥恵は両手をついて、要介に頭を下げた。」

「仇に巡り合うまでは何年でも流浪を重ねる覚悟でおりました」

「情報網という概念すらない時代。かすかな風聞を頼りに個人で諸国を尋ね歩く。江戸の仇を長崎で討てれば上首尾。仇討ちに出た百

人のうち九十九人までは、仇にめぐり会えぬまま年老いて青山に骨を埋ずむか、すこしでも才覚がはたらけば、さっさと刀を捨てるか。

「どちらにしても家名は断絶する。それが要介のおかげで、探索の労を経ずして一足飛びに仇と相まみえる運びとなりそうだった。こんなにも早く相手の所在を突き止め得た運の良さと要介の尽力とを、弥恵が疑う理由はなかった。」  
「できるものなら、俺も助太刀したいところだが――父が破談にした弥恵殿を表立って庇うのもはばかられる。」  
「小島要介では七郎の半分にも役立たない。ばかりか、足を引っ張られる。数が勝敗を左右する戦ではないのだ。三人でいつせいに斬りかかれれば同士討ちになりかねない。いかに連携を密にして闘おうとも、瞬間瞬間は対一の斬り合いになる。味方が斬られてもなお平静に敵と対峙し得るか、弥恵には覚束なかった。けれど要介の言葉に、弥恵は胸が熱くなった。弥恵には覚束なかった。けれど要介の言葉に、いいえ。仇の居所を突き止めてくださいましただけでも、弥恵に

は過分のご助勢です」

手にと自分の掌を重ねた。疊についたままになっている弥恵の

「あ……」

身を起こそうとする弥恵の手首をつかんで、要介がにじり寄つてきた。

「弥恵殿……」

「いけません。そのような……」

要介に抱きしめられて、弥恵の抵抗は弱々しかつた。もとより、武術に長じた弥恵のこと。まったくその気がなければ、掌を重ねられたときに振りほどいて、一瞬で立ち上がっていた。

しかし。当人の意思とは関わりなく決められたとはいえ、一度は

夫と思ひ定めた殿方。今はこうして、父親の目に遠慮しながらも、

八方手を尽くして仇の所在を探り出して、父親の目に遠慮しながらも、

いがあった。

「父の思惑など知ったことか。俺は……そなたと夫婦になりたい」  
同じ家老の職にある両家。ふたりは幼い頃から顔だけは見知って  
いたが、歳がはなれていれば、一緒に遊ぶどころか言葉を交わした  
こともすらない。縁談がまとまってからも変わりはなかった。要介が  
政衛門の名代で年賀の挨拶に訪れたときも、座敷へ招じ入れられた  
要介に、言葉少なに酌をただけだった。武家の娘としてではなく、  
ひとりの女人として、親が決めた許婚としてではなく、要介その人を、  
初めて男性として意識したのは、小島家に招待された観梅の宴のお  
りだった。  
「これから両家が手を携えて、藩を盛り立ててゆきましよう」  
耳元で囁かれて手を握られた。ただそれだけのことだったが、意  
識して殿方と肌を触れ合わせたのは初めてだった。瞬間、弥恵はふ  
たりきりの世界に引き込まれたが。要介にとつては何ほどの意  
味もないのだろうと、すぐに弥恵は思い直したものだ。男に交  
じって武術の修業をしていければ、いくらかは耳年増にもなる。要介

ほどの年齢の男が、女と肌を重ねていないはずがない。案外と、  
そういう悪所で覚えた『手管』というものだったのではないかと、  
ずっと後になつて思い至つたものだ。つた。  
そのときとは比べ物にならない勢いで言い寄られて。激しい動悸  
の中で弥恵は当惑しながらも、心の底には悦びもあつた。性欲の対  
象として見られながら、それを好もしく思う――幾分かは女性に共  
通の心理であるとして、それが弥恵の運命を大きく変えていくの  
だ。それが別の物語となる。  
「今こそ、そなたとひとつに……」  
「いた。いつのまにか弥恵は押し倒されて、要介の手が裾を割ろうとして  
いた。」「  
「いけませぬ……！」「  
「さすがに厳しい声で制して太腿をきつく閉じ合わせたが、まだ要  
介を押し返そうとはしなかつた。夫婦になれませぬ。十中八九は、返り  
「わたくしは、あなた様とは夫婦になれませぬ。十中八九は、返り

「討ちにされるでしょう」

「要介が強い力で腿の付け根に手を差し込んできて、指で股間をまさぐった。」

「ひ……」

みずからも滅多に素手では触れぬ女褰の合わせ目を生温かな異物で穿たれて、背骨を稲妻のような衝撃が駆けのぼった。耳元に荒い息が吐きかけられる。

「男女の交わりも知らずに死んでよいものか。女の悦びを、この肌に刻むのです。」

「この人は、わたしも遠慮も一瞬に消し飛んだ。頭の芯がすうっと冷えた。うえで、肌がまだ温かいうちにわたくしの身体を貪ろうとしているだけなのだ。」

「慮外者！」

叫ぶと同時に弥恵は、膝頭で男の股間を蹴り上げた。呻き声漏らして突っ伏す男の手から、身を翻して逃げた。だけでは怒りがおさまらず、うずくまつて悶えている要介の襟首をつかんで引き起こし、あらためて畳の上に投げつけてやった。――弥恵が憤然と茶屋を立ち去った後、要介がどのように取り繕うかは、知ったことではなかった。

四十九日の忌が明けたと同日に、七郎は前髪を落とした。その翌日には監察奉行所へ呼び出されて仇討免状を賜った。さらに会葬御礼の挨拶まわりに三日を費やしてから、中間の奎助ひとりを供に、留守居を頼んだ叔父の柴田満三郎とわずかな数の小者たちだけに見送られて、姉弟は旅立った。骨壺は墓に収めたが戒名札は、仏壇に祀ったままにしておいた。その日がくるかどうかはともかくとして、父が位牌に眠るのは、本願成就して後のことだ。目指すは咲川藩。小島要介が出鱈目を告げたのではないかという

疑念はあつた。しかし弥恵を呼び出すだけの口実ならば、高橋某だの他藩の陰謀だのは不要の話だ。弥恵を騙しておのれの物にするだけのつもりなら、たとえば――探りに出した者から報せがあつたが、まだ不確かなので藤原数馬の顔を知っている者をそちらへ向かわせている。など、弥恵の出立を引き留めるような嘘をつくのではないだろうか。だから九分九厘までは真実だろうと、弥恵は判断している。それに。もし一切が嘘だったとしても、ほかに辿るあてはない。

### 三・神崎古流

咲川藩の城下に到着した一行は、町外れの旅籠屋に昼のうちから投宿した。藤原数馬に顔を知られていない奎助が城下へ探りに出て、一刻半ほどで戻ってきた。

消息を尋ねるものにも、藤原数馬は武家町の一面に、あつかましくも『藤原古流』の看板を掲げていた。十余人の門弟のほとんどは藩士の子息だった。増沢藩を逐電してふた月かそこらで一等地に道場を開き、歴とした武家の弟子を集める。よほどの才覚か後ろ盾がなければ、できる早業ではない。

「困ったことになりましたです。かりに半分のお弟子が助勢するとしても……」  
「烏合の衆に何ほどのことができましょう」  
弥恵は、ことさらに軽んじるふうはなく、しかし一言で奎助の懸

念を否定し去った。実のところは、それほどの自信がない。七郎の動きを封じて、弥恵をも牽制する。三人も助太刀がいれば、それくらいいのことはできる。弥恵は七郎との連携を諦め、助太刀の動静も視野に入れないながら自分より強い敵と闘わねばならなくなる。もつとも、数が足手まといになるのも事実。藤原数馬が腕に自信があるならば、ひとりで闘うこともじゅうぶん。藤原数馬が腕に自信がある。一むしろ、都合です。仮初にも道場主が、ここそと逃げ出すわけにもいかないでしょう。高橋某に匿われていうのなら、その恐れはあった。闘えばおのれが勝つ――という自負が、藤原数馬にはあるだろう。しかし彼には同時に、負い目もあるはずだ。正々堂々の振る舞いをしたのであれば、逐電する必要はない。藩にとどまつておのれの正当性を主張し、容れられなければ腹を切る。武士であるかぎり、ほかに道はない。武士にあるまじき身の処し方をしたという負い目。そこへ加える

ならば――おとうと弟子、それも異性という意識を持つて接した対  
手（と考えるのは、弥恵の自惚れかもしれないが）に仇として狙わ  
れるという負い目。それらが、闘えば勝てる相手に背を見せるとい  
う挙動につながったかもしれない。この地にとどまる覚悟の表われで  
あろう。藤原数馬が道場を持ったのは、この地にとどまる覚悟の表われで  
となれば。弥恵たちも正面から挑むばかりである。翌日には姉弟  
して町奉行所を訪れ、仇討の届出をした。――  
――仇は増沢藩浪人、藤原数馬：ふうむ――  
――すでにこの事あるを、奉行所では承知していたらしい。町奉行み  
ずから出座して、取り調べにあたった。――  
――彼の者は、諸事奉行の高橋様の掛かり人である。一点の齟齬も無  
きよう取り計らわねばならぬ――  
――藤原数馬がどなた様のお世話になっっているかは、当方の与かり知  
らぬこと。馬場町に道場を開いた藤原数馬が、免許状に記された父

の仇と同一人物であることは、当人も隠しておりません。仇討の儀、お許しを賜りたくお願い申し上げます」

が、この十四歳といえ、当節では中学一年生か二年生。その少年が、ここが柴田家の正念場とばかりに、八万石の威光と対峙していない。弥恵は斜め後ろに控えて――女人のしやしやり出る場ではないと、分をわきまえてゐる。

「相わかつた。しかれども、事は重大ゆえ、つまびらかに吟味した上で沙汰いたす。それまでは軽挙妄動を慎まれよ。妄りに騒ぎを起さるれば取り締り致さざるを得ぬこと、お心にとどめ置かれるよう」

「しかつめらしく答える町奉行だったが、厄介事を持ち込んでくれたものだと、顔に書いてあった。苦情の矛先が七郎たちなのか藤原数馬なのかはともかくとして。他藩の者とはいえ、武士と武士の争いである。評定所へ問題を預けて、そちらで結論が出るまでの時間稼ぎだった。」

頭をこれからすぐにでも仇と相まみえるものと意気込んでいた七郎は、  
しばしの命拾いをした思いだった。もちろん、拾った命を猫ババす  
るつもりなど毛頭ない。わずかに与えられた時を命の上に積み上げ  
て：：しかし、正統な奇策の目途は皆目立っていないかった。道中、  
心の奥底に蠢いていたなにかも、今はひっそり閑としていた。  
「彼の者が父を闇討ちにしたら藤原数馬であることは当人が認めてい  
るというのに：：なにを吟味するというのでしょうか」  
こと宿へ戻つて。袴をはずして草臥れた単衣に着替えて。とくにす  
た。こともなくなる。七郎が子供のようになふくれっ面で鬱憤を口にし

「七郎」

元服して七郎の衣服をたたむ手を止めて、きつい目で弟を見上げた。  
いたが、今は意識して呼び捨てた。『七郎殿』と呼ぶようにして

「わたくしたちで勝てる相手だと、本気で思っているのですか？」  
「いえ……ですが……」

自分をやるかにしのぐ剣達者に言われて、七郎は返す言葉もない。  
「天が与えてくださった最後の猶予と思いなさい。はやる気持ちを鎮めて、すこしでも業前を磨きなさい」  
「旅に出てこの方、わずかな型稽古しかつけてくれないではないですか」

「掛り稽古など無用です」  
弥恵が、ぴしりと言った。

「元太刀の力量が違います。姉を相手に掛り稽古をすれば、藤原との闘いではかえって勘が狂います」

一つ紋の小振袖で端座する弥恵の姿が七郎には、旅路の男装よりも武張って見えた。  
「真剣では太刀筋の疾さと気迫だけが勝敗を分けます。一刀にて仇を両断するつもりで、千遍でも万遍でも素振りを繰り返しなさい」

「……わかりました」  
七郎は両刀を携えて部屋を出ていった。いかに弟とはいえ、元服を済ませた男の前にして女が着替えるわけにはいかない。彌恵は七郎の着物にあらためた。そうしてふたたび畳に座つて。ため息とぼらしい形にあらためた。そうしてふたたび畳に座つて。ため息ともつかぬ細い息を長々と吐き出した。七郎は神崎古流の型をひと通りは演じられる。しかし、態勢に応じて無意識に型を使い、それを破られても臨機応変に対応できるといふ進境には、あまりに遠い。藤原を相手に型を使つても、その型に固有の隙につけ入られるだけだ。それより、は、相手がかわす余裕のないほどの疾さで、受けようのない剣威とを、目指して――力押しの修練を積むほうが、まだしもだった。そして、ここから先は言葉の端にも表わさないよう気を使つていたのだ。格下の弟を相手に稽古をすれば、彌恵の剣技は確実に落ちる。九の腕が八に落ちて四の腕が六に上がったとして、総合戦

力が十三から十四に増すのではない。十対九の戦力差が十対八に広がるだけなのだ。

翌早朝。旅籠屋の裏にある狭い空地で稽古をして、裏庭の井戸で半裸になつて汗をぬぐい衣服を替えてから。弥恵は部屋の間で座禅を組んで心気を整えた。無念無想――を、神崎古流は求めない。剣技の工夫に想念を巡らせようと、打ち据えられた悔しさを噛み締めようと、勝手である。帰り道に弟と甘味屋へ寄ろうか儉約しようかと迷つてもかまわなかつた。目に映じる光景を遮断して想念を追う。それもまた、没我の境地には違いない。

弥恵の想念は、師匠から最後の教えを受けた日へと遡つた。初七日の翌日。仇討の届出やら元服の仮親頼みやらでばたばたしている七郎の名代として母方の親戚をまわり、最後に神崎道場を訪なつた。神崎道場へかようなときの弥恵は、男装ではないものの袴を着けて脇差を帯びている。それが今日は、五つ紋の裾さばきを氣遣

いながら武器も懐剣だけというのは、どうにも心許ない気分だった。師匠に会葬御礼の口上を述べて。辞去しがたく、沈黙のうちに時が過ぎる。といつても、障子から差す夕刻の陽が動くほどではなかった。

「斬られに行くのか」

ぽつんと、神崎正安がつぶやいた。

神崎正安、五十七歳。城勤めなどは五十歳が引退の目安だが、どう見てもこの男は壮年の盛りだった。最近はいささか痩せてきたが、それは一年三百五十四日欠かさぬ素振りで若いころの脂肪が削ぎ落とされただけで、筋肉は衰えていない。短めの総髪を後ろへなでつけた髪型は、激しい鬪いで髷の元結が切れて髪に視界を遮られない用心だった。

「七郎殿を侍でいさせるには、それしかなからう」

その、精力にあふれた男の声が、無念と諦念とに縁取られている。

「そして、侍として死ぬるか」

「侍を捨てよ——と、おっしゃるのですか。柴田の家を捨てよ、と？」  
神崎正安は、俗世の名誉に重きを置かない。むしろ輕蔑していた。  
弥恵も、昨日までは迷っていたのだ。七郎は仇討を当然のこ  
とと、疑ってはいない。仇討を果たさなければ、柴田の家はない。  
くなくとも、増沢藩士ではいらなくなる。しかし、運よく仇を追  
い詰めたとしても、その先の十にひとつあるかないかの幸運に、ふ  
たりの命を賭けてよいものだろうか。大坂あたりの人中に紛れて、  
姉弟ひとつそりと暮らしてはいけないうか。だろいうか。  
否——と、弥恵の中で強く叫ぶものがあつた。柴田の家など、二  
本差しとまとめて捨てても、七郎の思い入れは別して、弥恵として  
はかまわない。けれど、父の無念を晴らさずにはいられない。一所  
懸命に藩の財政を立て直してきた父を奸臣呼ばわりして斬殺した藤  
原数馬に、ひと太刀なりとも浴びせねば、父も浮かばれまい。  
それでは違——と、諭す声も聞こえてくる。姉弟が命を捨てて、  
それを父は喜ぶだろうか。よくぞやりましたと、母は褒めてくださ

るだらうか。

「正安が弥恵を見据えて、先の問いにゆっくりと首を横に振った。

「それは人を捨て、おのれを捨てると同じだ」  
姉弟の心に、子として父の無念を晴らしたいという思いがいささ

かでもあるのなら、仇討は当人の尊厳にかかわる問題となる。

闘うすべを知らぬ者なら、恨みを呑み込んで生きる道もある。

しかし、武士とはいわない、闘う力を持つている者には、その道は

選べない。おのれの心を偽ってほんの数十年を生き永らえたとして

も、それは自己嫌悪に苛まれつづける生であり、慙愧にまみれた死

となろう。

正安は畳の縁に目を落として、もういちど首を横に振った。

「弟子と弟子とが、仇と討手とに分かれて相まみえる。戦国の世で

は、親子が合戦をした例もある。侍とは：：武術とは、所詮そう

いうものであるな」

弓矢も剣も使えず組討すらもおぼつかぬ者は、仇を討とうとは端

から思いつきもしないだろう。その是非はさて措くとしても。

「沈黙が流れる。暈の上で、薄赤い陽が這うように動いていった。」

「人ひとりを斬るのは、三年の稽古に匹敵するとうい」

「正安が、またぽつんと言葉を置いた。三年の稽古とは、剣技の上

達ではない。死生観が変わり度胸が据わるのだと、正安は言葉を継

いだ。」

「まずは、正統な奇策を練ってみることかな」

「これは二十五の歳に長崎で伝え聞いた話だが、と断わって。正安

は、コロンブスの卵の逸話を弥恵に語って聞かせた。断わって。正安

「小太刀を封じるために大刀を捨てて組討に持ち込むのも、正統の

奇策ではある」

「……」

「弥恵はうなづいたもの、具体的な工夫がすぐに浮かぶわけもな

い。西へ逃げたか東へ奔ったか、皆目わからない。藤原数馬の消息を

追いつながら、日月を重ねて研鑽を積むしかない。ひと月後には消息

どころか居座った先さえも突き止めることになろうとは知るすべのない弥恵だった。

「師匠の教えはこれまでと、弥恵が畳に手をつこうとしたとき。

「気を盗む工夫を忘れるな」

「それまでの、闇を探っていたような口ぶりとは打って変わって、

正安が断定的に言った。

「そなたの手の内は知り尽くしていると藤原が慢心すれば、そこに

外連のつけ入る隙が生じるやもしれぬ。だが、彼とてもそなたが常

と同じに仕掛けてくるとは思わぬはず。それとも、敢えて常と同じ

に小太刀で相對するか？」

「：：まだ、わかりません」

「おのれの心に問いながら、弥恵は答えた。が、両手を膝に置いて

発した言葉に、迷いはなかった。

「勝つ工夫に卑怯も邪道もないと、常日頃、ご教示賜っております。

これを肝に銘じまして、正統な奇策を練りたいと存じます」

屋に満ちていた。大きく息を吐いて、弥恵は眼を開けた。陽の光が部  
 屋に満ちていた。弥恵も七郎も、これといつてす  
 ることがなかった。仇を見張る必要もない。藩の重臣の庇護を受け  
 て道場までかまえてゐるのだから、勝てる相手から逃げ出すはずも  
 ない。一日に一度、奎助に様子を見に行かせれば、それだけでもじ  
 ゆうぶんに過ぎる。弥恵自身は、藤原数馬の顔など見たくもない。  
 仇を目の前にすれば心が騒ぐ。自分は暴発などしないだけの分別を  
 そなえてゐるつもりだが、弟はどうか。正月の時分はまだ子供  
 に見えた七郎が、昨日は役人を相手に堂々と渡り合つた。心身とも  
 に急速な成長を見せてゐる。それだけに、不安定な面も垣間見える  
 のだった。

七郎の姿は、部屋になかつた。障子の向こうから気合声が聞こえ  
 てくる。奎助に勧められて、宿場ごとの名物料理などは味わうもの  
 の、部屋は安いところを選んできた。必然、裏庭に面した一階の奥

と、ということになる。

「だ、い、ぶ、ん、日、も、高、く、な、り、ま、し、た、」

部屋の隅で絵草子を読んでいた奎助が、珍しく彼のほうから話し

かけてきた。

「お昼がてらに、お嬢様も町へ出てみられては如何でしょう。こん

な辛気臭い部屋に座り込んでちゃ、足に根が生えます」

この十五日の旅のあいだ、食事は日に二回だった。早朝に出立し

て、巳の刻へ午前九時を過ぎた頃に宿で作ったもちもちの弁当（た

いて、いは握り飯と香の物）を食べる。そして、日が落ちる前に投宿

して、近くの飯屋で夕食をとる。その伝でいけば、そろそろ朝と昼

とを兼ねた食事の頃合いだった。

「それ、もうです。七郎殿を呼んできます」

弥恵は気軽に立った。ひとりきりの型稽古では、想念に描いた藤

原数馬にさんざん打ち破られ、しかも最後に決まっただけで、要介に斬殺

される。正統な奇策など、かけられ、しかも湧いてこない。気分一新。とい

うのは、半分は無意識裡の言い訳。間近に迫った死を見据えながらひたすら稽古に励む身とはいえ、弥恵も十七歳の乙女。増沢藩をしのぐ城下の賑わいを覗いてみたくなかった。増沢藩を「町が大きなね」なるほど料理がまずくなるというのは、どうしたものでしょうかね」旅籠屋を出た正面にある蕎麦屋で、ただ胃の腑を満たしてから。とくに目当てもなく、人が賑わっている方角へ足を向けた。弥恵がすぐ気づいたのは、豊かさとは貧しさとだった。店の数も人通りも、増沢藩城下の数倍。石高以上の差異があった。きらびやかな帯を締めて、増沢藩では滅多に見られぬ贅沢な簪やら鼈甲櫛で髪を飾った娘も少なくない。丁稚のお仕着せも小奇麗で、車曳きまで垢抜けている。その一方で、道行く人の袖を引いて小銭をせびる子供や、ぼろぼろの墨染め衣をまとって店先に立ち、喜捨をもらうまで声高に声明を唱えつつける乞食坊主の姿も、そこそこで見かけた。

現代の言葉でいえば、貧富の格差が大きい。その裏にある経済の歪みを、父の薫陶を受けた弥恵はおぼろに感じ取っていた。